筑紫女学園大学リポジト

A Categorical Approach to Compound Nouns based on a `Naming Process'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/449

命名プロセスとしての複合名詞　―カテゴリー分析―

緒　方　隆　文

A Categorical Approach to Compound Nouns based on a 'Naming Process'

Takafumi OGATA

1．はじめに

本稿では複合語、とりわけ複合名詞を、命名プロセスの観点から考察する。複合語は複数の語で構成され、全体で一つの語として存在する。一つの語であるためには、他と区別されるカテゴリーになっていると考えられる。doorknobであれば、ドアの取っ手というカテゴリーがあり、そのカテゴリーをdoorknobと命名し表現する。つまり複数の語を用いてカテゴリーに名前(ラベル)をつける命名プロセスこそが、複合語形成のプロセスと言える。複合語形成のプロセスを知ることが、複合語そのものを理解することにつながる。本稿では複合名詞を考察し、複合語形成プロセスを明らかにし、意味の分類をすることを目的とする。

本稿の研究対象は、複合名詞、とりわけ２つの名詞(句)から構成されるものに限定する。というのも本研究に先立ち、緒方(2013b, 2014)で２つの名詞を結びつける３つの句表現、<NP1のNP2>, <NP1's NP2>, <NP2 of NP1>を考察した(以下、前から「の」表現、属格表現、of 表現と呼ぶ)。本稿では、この３つの句表現と日英の複合名詞(NP1+NP2)がどのように、棲み分けがなされるのか、あるいは共存しているのかを明らかにしたい。

句表現分析では、カテゴリー分析が用いられ、比喩のプロセスが働くとした。この比喩の生成プロセスをもとに意味を分類し、その適否を検証した。複合名詞も同様に、この比喩プロセスが適用され、生成プロセスによって意味が分類されると考える。意味の分類もまた緒方(2013b, 2014)をそのまま踏襲し、句表現と比較するために用いていく。句表現で用いた比喩プロセス、それに加えて命名プロセス(cf. 緒方 2012)を用いて、複合名詞を考察し、複合名詞分析においても、カテゴリー分析が有効であることを示していく。

２．命名プロセスとカテゴリー

緒方(2012, 2013a)で考察した命名プロセスを概観する。命名は、他と区別するためにある。そのため名前の中に、それと特定できる要素が必要になる。この特定には２つあり、一つはカテゴリー特定、もう一つは成員特定と論じた。つまり名付けるとは、それがどんなカテゴリーに属して(カテゴリー特定)、そのカテゴリーの中でどの成員か(成員特定)を示すことと考えた。特定されるカテゴリーはその成員が属する最小のカテゴリーになる。しかしこの最小カテゴリーは、文脈等から明らかであったり、明示する必要がない場合は、必ずしも名前に現れない。単に成員特定のみが名前に現れることも多々ある。例えば「青梅街道」の場合、<街道>が最小カテゴリーを表し、<青梅>がどの成員かを特定している。一方、「赤霧島」の場合、最小カテゴリーは<酒>で明らかなため、成員特定部分の<赤霧島>のみが名前に現れている。そしてこの成員特定における特定方法として、緒方(2011)で述べた比喩プロセスが働くと主張した。

この比喩プロセスは、同一化と焦点推移という２つのプロセスからなる。つまり比喩とは、別々のものを同じとみなし(同一化)、より目立つ方に置き換える操作(焦点推移)であると考えた。比喩を置き換え表現の一種とみなしたのである。これが１つのカテゴリーで、ないしは複数のカテゴリーでおこるとした。単一カテゴリーにおいては、成員とラベル間で焦点推移がおこる(単一カテゴリー推移)。一方複数のカテゴリーでは、一方のカテゴリーからもう一つのカテゴリーへと焦点が推移する(複数カテゴリー推移)。この同一化と焦点推移、ひいては単一カテゴリー推移と複数カテゴリー推移は、そのまま複合名詞においても当てはまると考える。そしてこの比喩プロセスの生成プロセスをもとに、そのまま意味の分類をしていく。

３．複合名詞

複合語は数多くの研究がなされ、クオリア構造による分析、フレーム意味論による分析も含めていろいろ提案されてきた(Lees 1966, Adams 1973, Levi 1978, Selkirk 1982, Johnston and Busa 1996；影山 1993, 石井 2007, 姫野 1999, 由本 2005, etc.)。複合名詞に関する研究も多数あるが、複合名詞の生成プロセスと意味の分類を組み合わせて論じたものは少ない。その理由の一つに、多様性がある。まず組み合わせだけをみてもいくつもある。研究者によって数は異なるが、例を挙げれば山根(2005: 54-55)では英語が12パターン((1))、奥津(1975: 23-30)では日本語が10パターン示されている((2))。

(1) a. [N1+N2]型, b. [N+V]型, c. [N+Ving]型, d. [N+Ver]型, e. [V+N]型, f. [Ved+N]型, g. [Ving+N]型, h. [Adj+N]型, i. [V+Adv]型, j. [V+P]型, k. [P+V]型, l. [P+N]型

(2) a. NN型複合名詞, b. AdvN型複合名詞, c. AN型複合名詞, d. VN型複合名詞, e. V-Aux N型複合名詞, f. V型複合名詞, g. NV型複合名詞, h. NA型複合名詞, i. AdvV型複合名詞, j. AdvA型複合名詞

一見して分かるように必ずしも名詞が含まれる必要はない。実際NP1+NP2の形をとったとしても、必ずしも名詞にはならない。dog-earは動詞、kingsizeは形容詞、partwayは副詞である。そのため組み合わせだけで品詞が決まるわけではない。

また形態においても、ソリッド型だけでなくハイフン型、分離型がある。見た目に一語になっていなくてもよい。さらにbread and butterのような句複合語では、句と形態的に変わらない。属格表現を用いたchildren's clothes, women's collegeのような複合語もある。さらには、恒久的なものだけでなく、その場限りの一時的な複合語も(3)のように簡単に作ることができる。

(3) *a never-to-be-shaken* loyalty, a *strongly-to-be-derived* present, etc.(安井他 1976)

ここまでくると複合語とは何かという根本的な問いにつきあたる。複合語は、全体の意味が部分の意味から導けないと述べられることもあるが、総合的複合語をはじめ、部分から全体の意味を容易に推測できる複合語も数多くある。そのため複合語を考えるとき、複合語だけを考えるというより、句表現でないものと考えた方がいいように思える。

本稿では、複合語と句表現の違いは、カテゴリーであるかないかの違いと考える。つまり形態や意味や恒久性によって、句表現と区別されるのではなく、語としてまとまっているかどうかが問題となる。複合語であればカテゴリーをなし、句はなさない。本稿では、複合名詞の中で最も生産的な(1a)(2a)の、名詞が２つ並ぶ複合語を見る。このNP1+NP2の形式に限定した上で、内心複合語を中心に、複合名詞の生成プロセスと意味を見ていく。外心複合語は、内心複合語を応用したプロセスになるが、ここでは扱わない(cf. 緒方 2013a: 36-37)。

さてここで句表現も含めた全体像を、先回りして表(4)に示す。(4)ではカテゴリー推移をもとに分類している。この分類は緒方(2014)で用いたものと同じである。分類は、まずカテゴリーの数で２分される。一つのカテゴリー内で焦点推移がおこるものを単一カテゴリー推移、複数のカテゴリー間でおこるものを複数カテゴリーと呼ぶ。次に向きと変項の有無により、タイプAからタイプDへと４分される。ラベルから成員への推移をタイプA、成員からラベルへの推移をタイプBとする。また変項を含めばタイプC、含まなければタイプDとする。さらに成員の種類で、個体成員か属性成員かサブカテゴリーかで10に分類されている。最後に用法によって、26に細分される。この26に細分されたものに、句表現と複合名詞の適否が記されている。○は生産的、△は制限がかかる、×は存在しない、◎は棲み分けにより、他表現に比べもっぱらその形式が選ばれることを意味している。

一見すると、意味なく適否が決まっているように見えるが、傾向がある。タイプA1では、とりわけ最初の２用法は生産的だが、A2では複合名詞は非生産的である。A3は適否の傾向が日英で似ている。タイプBは、属格表現を除き、句表現も複合名詞も生産的であることが分かる。B1の[成員列挙]では日本語の複合名詞で棲み分けがある。タイプC1はおおむね生産的ではあるが[飽和名詞の関係概念]においては棲み分けがあり、句表現で表現する。C2では句表現と複合名詞で、棲み分けが見られる。タイプDでは、日本語は句表現と複合名詞の棲み分けがないが、英語では[二重所属][程度一致]で棲み分けがある。次節以降、具体的に見ていくこととする。

(4)

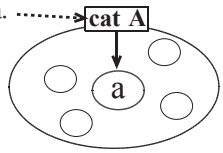
		NP1	NP2		成員	用法	日本語 複合名詞	日本語 句 AのB	英語 複合名詞	英語 句 A of B	英語 句 A's B
単一カテゴリー推移	タイプA	ラベル →	成員	A1	個体成員	全体と部分	△	◎	○	○	○
						時間等の状況背景	○	○			
						集合体の成員	×	×	×	◎	×
				A2	属性成員	全体と部分	×	◎	×	◎	○
						属性強調	△	◎		◎	×
						間柄	△(親族)	○		×	×
				A3	サブカテゴリー	種類	×(同格)	◎	×(同格)	△	△
						行為名詞と付加詞	○	○	△	◎	×
	タイプB	成員 →	ラベル	B1	個体成員	全体と部分	○	○	○	○	×
						成員列挙	◎	×	△	×	
				B2	属性成員	数属性の強調	○	○	○	○	
						地名属性	△(モノ)	○	△(モノ)	△	
						役割属性	×(同格)	◎	△(呼称)	×	
						数量名詞	○	○	○	○	
				B3	サブカテゴリー	所属カテゴリー	△	◎	◎	△	
複数カテゴリー推移	タイプC	cat A (成員) →	cat B (ラベル)	C1	個体成員 (cat Bに変項)	非飽和名詞	○	○	○	○	○
						関係概念			△		△
						飽和名詞の関係概念	×	◎	×	◎	△
						数量・性質	○	○	○	○	○
						行為名詞の項			△		
		cat A (ラベル) →	cat B (ラベル)	C2	属性成員 (cat Aに変項)	属性特定	○	○	◎	○	×
						否定的呼びかけ	×	◎	×	×	
						属性の比喩		×		◎	
	タイプD	cat A (ラベル)(成員) →	cat B (ラベル)	D1	個体成員	二重所属	○	○	◎	×	×
				D2	属性成員	属性一致	○	○	○	○	
						程度一致			×	◎	

4．単一カテゴリー推移(Single Category Shift)

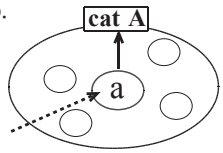
単一カテゴリー推移では、一つのカテゴリー内で焦点推移がおこる(以下、図ではカテゴリーをcatと記す)。(5a)のように、cat Aのラベルが参照点となり成員 a に焦点推移するタイプAと、(5b)のように、成員 a が参照点となりcat Aのラベルに推移するタイプBがある。

しかし複合語は、推移先のNPだけがラベルになるのではない。参照点NPと推移先NPの両方が、ラベルに組み込まれる。そのため(6)のプロセスを経ると考える。焦点があたったものはすべてラベルに編入される。ラベルでの並びは、焦点推移の順番となる。タイプAの(6a)では、成員への焦点推移後、ラベルと成員がゲシュタルト化し(破線の楕円部分)、ラベルの後ろに組み込まれる。一方タイプBの(6b)でも、ラベルへ焦点推移した後、ゲシュタルト化し、ラベルの前へと組み込まれる。さらに複合語特有なものに、成員間のみで焦点推移する場合がある。タイプB1の[成員列挙]がそれで、成員に順次焦点推移した後、ゲシュタルト化し、ラベルへと推移し、そのまま編入される。これを示したものが(6c)になる。よって全部で３通りのパターンがある。

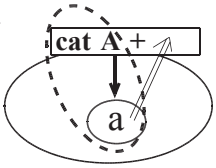
(5) a.



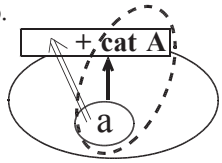
b.



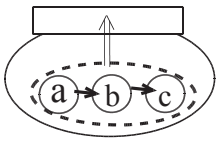
(6) a.



b.



c.



4．1　タイプA：[ラベル]から[成員]への推移(5a)(6a)

タイプAでは、ラベルから成員へ焦点推移する（cf.(5a)(6a)）。成員の種類によって３つに分けられる。タイプA1は個体成員、タイプA2は属性成員、タイプA3はサブカテゴリー成員になる。複合名詞の適否は、日英で似てはいるが、細かくは異なる。以下具体例を示しながら見ていく。

4．1．1　タイプA1：<全体と部分>, <時間等の状況背景>, <集合体の成員>

タイプA1は、ラベル(NP1)から個体成員(NP2)に焦点推移する。句表現では、代表的なタイプとなり生産性が極めて高い。複合名詞でも生産的な用法はあるが、句表現に比べると生産性は落ちる。というのも複合名詞では、句表現と異なり、カテゴリーと認識されなければならない。そのため条件がややきつくなる。ここでは３種類の用法を見る。１つめは[全体と部分]で、ラベルが<全体>、成員が<部分>の関係にある。日本語の複合名詞の場合、(7b)にあるように適格な例もあるにはあるが生産性は低い。全体と個体成員の組み合わせがカテゴリーをなすとみなされないからと考えられる。むしろ「の」表現で用いられることから、句表現と複合名詞で棲み分けがあると言える。一方英語の複合名詞では、(8)のように、適格な例は数多くある。<車エンジン>が不適格で、<car engine>があることから分かるように、日本語と英語では、何をもってカテゴリーとするかの傾向が、異なっていることが分かる。

(7) a. *車エンジン, *家窓, *家柱, etc.　　b. 繊維表面, 人頭, 人顔, 人目(じんもく), etc.

(8) car engine[*1], house-roof, fabric surface, humanface, etc.

２つめは[時間等の状況背景]で、NP1が個体成員(NP2)の時間等の状況背景を表す。複合名詞はカテゴリーとして成り立つことを要求される。そのため一時的な時間や状況を述べたものは基本、複合名詞にならない。しかし他と区別される(9)(10)のような例は適格となる。ただし文脈の助けが必要な場合もある。例えば「現代若者」は雑誌・書籍などで散見されるが、使われる文脈が決まっており、容認性に幅がでる。なお日英ともに、句表現においても複合名詞においても適格であるが、日本語の場合、複合名詞は句表現に比べ生産性が低くなる。

(9) 現代音楽、近代文学、安土桃山文化、現代劇、etc.

(10) Imperial period Romans, Victorian era playwrights, etc.

３つめは[集合体の成員]で、個体成員(NP2)が集合体(NP1)の任意の成員になる。(11)に示すような英語の二重属格のみに見られる用法で、of 表現のNP1の位置に属格名詞が現れる。属格名詞句が定で人間でなければならないなどの条件が課せられる(Quirk et al. 1972)。(12)の属格表現は意味が異なるため、この用法にならない。また(13)のように複合名詞にすることもできない。日本語においても「の」表現でも複合名詞においても作れず、別の長い表現が必要となる。そのためこの用法は of 表現のみがもつ用法と考えられる。

(11) a work of Milton's, a friend of his father's/my parents' (Quirk et al. 1972：203)

(12) Milton's work, his father's friend　　(13) *a work Milton's, *a friend his father's

４.１.２ タイプA2：<全体と部分>, <属性強調>, <間柄>

タイプA2は、ラベル(NP1)から属性成員(NP2)に焦点推移する。タイプA2の複合名詞は日英ともに生産的ではない。右主要部規則に従い、属性成員(NP2)が主要部となることが多いが、カテゴリーにいたるものが少ない。言い換えれば、タイプA2は、句表現と棲み分けがなされており、もっぱら句表現で表現するのが自然である。緒方(2014)にならい、タイプA2に３用法を示す。１つめは[全体と部分]で、ラベル(NP1)が全体を表し、成員(NP2)がその属性になる。これは日英ともに、適格な複合名詞はない。カテゴリー性が弱いためと考えられるが、もっぱら句表現で表現される。日英ともに、表現に棲み分けがなされている。

(14) *Nazis cruelty, *firefighter courage, *woman beauty, *man strength, etc.

(15) *太郎賢さ(cf. 太郎の賢さ), *血赤色(cf.血の赤色), *猫ジャンプ力, *ナイフ切れ味, etc.

２つめは[属性強調]で、属性成員(NP2)が強調される。この成員は、ラベル(NP1)の典型的属性になる。ここにも日英ともに、もっぱら句を使うという表現の棲み分けがある。ただし日本語の複合名詞では(16a)のような例がある。さらに(16b)のように他の名詞に付加することもある。用例としては決して多くはないが、一種のカテゴリーとみなされている。句表現の方が生産的ではあるが、その中でカテゴリー性が強く感じられる場合のみ複合名詞として適格になる。

(16) a. 揚げたてアツアツ、茹でたてほくほく

b. 揚げたてあつあつてんぷら、茹でたてほくほく枝豆

しかし、一方英語においてはこの種の複合名詞は見当たらない。ice coldness という表現もあるが、これは coldness を強める意味で ice が比喩的に使われており、ここには含まれない。

３つめは[間柄]で、使い手との間柄が、属性成員(NP2)に現れる。この用法は、句表現では日本語の「の」表現に特有である。日本語の複合名詞の場合、(17a)のように親族関係に限定された複合名詞は適格となる。しかしそれ以外の表現では、不適格となる。２つの構成名詞の結びつきが弱く、一つのカテゴリーを形成していると見なされないからと考えられる。一方英語の複合名詞は(18)にあるように不適格となる。順番を逆にした(19)は適格ではあるが、これはタイプB２の[役割属性]に属する表現でここと は関係がない。

(17) a. 太郎兄ちゃん、よしみ姉さん、聡子おばちゃん、孝志おじさん、etc.

b. *佐藤だんな（佐藤=だんな）、*鈴木兄貴（鈴木=兄貴；cf. 鈴木の兄貴）、etc.

(18) *Tom Uncle, *Mame Auntie, *Taro Brother, *Anne Sister, etc.

(19) Uncle Tom, Auntie Mame, Brother Taro, Sister Anne, etc.

4.1.3 タイプA3：<種類>, <行動名詞と付加詞>

タイプA3では、成員(NP2)が、ラベル(NP1)のサブカテゴリーであり、種と類の関係になる。緒方(2014)にならい、２用法あげる。１つめは[種類]で、NP2がNP1のサブカテゴリー(種類)になる。日本語では(20a)のように、一見適格とみられる表現がある。しかしNP1とNP2の間でポーズが置かれており、アクセントパターンから考えて複合名詞ではない。これらは同格表現の一種と考える。そのため複合名詞の例としては不適格と考える。なお同格表現では、句よりもさらに、NP1がNP2より際立ちを持つことを要求する。NP1の際立ちが弱い場合、(20b)のように不適格となる。

(20) a. ジョニーウォーカー黒, カローラ1500cc, サラブレッド牡, 牛丼大盛り, etc.

b. *シェークバニラ, *にぎり特上, etc.

英語の場合も同様で、(21a)のような例はすべて同格表現とみなす。そのため英語にもこの用法の複合名詞はないと考える。なお棲み分けにより、(21b)のように属格表現を好むものもある。

(21) a. Johnnie Walker Black Label, Vanilla ice cream, Coca Cola Glass Bottle, etc.

b. *Ballantine 30 Year Old (cf. Ballantine's 30 Year Old), etc.

２つめは[行為名詞と付加詞]で、ラベル(NP1)が行為名詞、属性成員(NP2)がその付加詞になる。義務項でないため、カテゴリーはNP1に関連するゆるやかな集合体となっている。日本語においては、句表現同様、(22)に示すように複合名詞にも適格な例がある。しかし(22)では「出発空港」「料理材料」に？がついている。これらは旅行関連ないしは料理関連の書籍において実際に使用されているが、通常の会話ではカテゴリーと認識しづらい。そのためこれらのカテゴリー認識には、文脈が必要である。そのため？がついている。とはいえ用法[行為名詞と付加詞]としては、生産的な複合名詞とみる。

(22) 結婚目的、通学手段、開始時刻、受講態度、？出発空港、？料理材料、etc,

一方英語の場合には、(23)のようにあるにはあるが、of 表現がより自然である。そのため表現の棲み分けがあると考えられる。英語では、カテゴリーをなすと見なしにくいと考えられる。

(23) commutation cost, departure airport, start time, etc.

4.2 タイプB：[成員]から[ラベル]への推移(5b)

成員(NP1)からラベル(NP2)に焦点推移するものが、タイプBになる。タイプA同様、成員の種類により３つに分類される。個体成員であればタイプB1、属性成員であればタイプB2、サブカテゴリーであればタイプB3になる。句表現のうち、「の」表現は[成員列挙]以外すべて適格、属格表現はすべて不適格、of 表現は一部用法が不適格となる。複合名詞の場合、ラベルがNP2に

くることで、右主要部規則と適合するものが多く、代表的なタイプであり生産的である。

4.2.1 タイプB1：<全体と部分>, <成員列挙>

タイプB1では、個体成員(NP1)から、ラベル(NP2)へと焦点推移する。日本語の複合名詞の場合、まず三宅(2011: 83)であげる主要部同格型に対応するものがある。この場合(24)に示すように制限が厳しい。適格なものもあるが、大半が不適格になる。

(24) 日本国(cf. 日本の国), 漢国(cf. 漢の国), 富士山(cf. 富士の山), *クリスマス日
(cf. クリスマスの日), *神戸町(cf. 神戸の町), *赤とんぼ歌(cf. 赤とんぼの歌), etc.

しかしこの用法には、典型的な命名パターンが含まれる。そのため生産性は極めて高い。命名は、カテゴリー特定と成員特定からなる。カテゴリーは明示する必要がない場合、必ずしも現れない。しかし現れる場合、このパターンをとる。本稿では、複合名詞かどうかは、カテゴリーをなすかどうかで判断される[*2]。そのため(25)のような固有名詞であってもここでの分析に含める。

(25) 俵屋旅館, 俵屋酒店, 俵屋スーパー , 国分小学校, 国分中学校, 国分市役所, 国分銀行, etc.

(25)ではNP1が成員、NP2が属するカテゴリーを表す。成員特定部分のNP1は比喩プロセスが働いているため、(24)よりも操作が増える(cf. 緒方 2012)。しかし成員(NP1)と属するカテゴリー(NP2)が合体し複合名詞を作っている点では、(24)の日本国や富士山と同じと考えられる。そのためこの用法は極めて生産的と言える。ではなぜ(24)で不適格な例がでるかというと、カテゴリーを特定する必要がないからと考えられる。クリスマスと言えば、日にちのことであるし、その他も同じである。そのため、あえて付加したものが不適格になると考えられる。

一方英語の複合名詞においては、日本語よりも、生産性が高い。日本語では「クリスマス日」が不可だったのに対し、英語ではChristmas dayは適格となる。そのため何をもってカテゴリーとみなすかは言語によって異なる。しかしそれでも、America countryが不可になることから、不要なカテゴリー特定をすると不適格になるのは、英語においても同じといえる。この用法は句表現では「の」表現と of 表現が適格になるが、特に棲み分けがあるわけではない。

(26) Christmas day, Hawaii island, London city, *America country, etc.

２つめは[成員列挙]という複合名詞特有の用法になる。これは成員の数が少ない場合、成員を列挙し並べて、カテゴリーラベルになる。並列複合語と呼ばれるもので、(27)のような例がある。

(27) 男女、東西、親子、白黒、天地、生死、日米、左右、慶弔、往来、裏表、etc.

例えば男女であれば、カテゴリー内の成員は男と女の２つのみが、主観的に存在する。この２つの成員名に焦点があたり、ゲシュタルト化し、ラベルへと編入される(6c)。編入の結果、焦点がラベルへと推移する。個体成員からラベルへ焦点推移しているため、タイプB1に含める。並びの順番は、焦点推移の順番(この場合成員から成員への推移となる)で、音声学的要素など様々な要因によって順番が決まる。また成員の数はあくまで主観的で、その主観的な成員すべてが並ぶ。３つであれば、「松竹梅」「陸海空」などがある。４つであれば、「東西南北」などがある。日本語では複合名詞のみで、句表現にはない。よって表現に棲み分けがある。

一方英語の場合、この用法は(28)のような句複合語にいくつかある。しかしN+Nの複合語ではないので、(4)の表では△としてある。

(28) watch and chain(鎖付き時計), cup and ball(剣玉), give-and-take(協調), etc.

4.2.2 タイプB2：<数属性の強調>, <地名属性>, <役割属性>, <数量名詞>

タイプB2では属性成員(NP1)から、ラベル(NP2)へと焦点推移する。緒方(2014)にならい4種類あげる。1つめは[数属性の強調]で、NP1が、NP2の数属性になっており強調される。カテゴリー性に若干違いはあるが、属格表現を除き、日英とも複合名詞にも句表現にも適格な例がある。

(29) 30円コロッケ, 15cmブロック, 1000円カット, 100円レンタカー , etc.

(30) 10cm block, four-meter fence, 500g sirloin steak, $20 dollar entry, etc.

2つめの[地名属性]は、NP2(人や物)が持つ地名属性をNP1が表す[*3]。複合名詞では、NP2が物の場合には、(31)(32)のように日英ともに適格な例がある。

(31) 東京土産, 東京市政, 東京名所, 東京生活, etc.

(32) New York souvenir, New York life, New York Democrat, etc.

一方NP2が人の場合、(33)(34)のように日英どちらも不適格になる。人に地名をつけたものが、カテゴリーをなすとみなされないからと考えられる。そのため[地名属性]の場合、NP2が人か物かで適格性に差がでる。

(33) *New York uncle, *Tokyo Sakata, *U.S.A aunt, etc.

(34) *神戸おじさん, *巣鴨おば, *東京坂田；(cf. 神戸のおじさん, 巣鴨のおば, 東京の坂田)

しかし(35)のように、人に別の属性を表す名詞句が付加されると適格な例がある。

(35) 甲子園名物おじさん, 奈良騒音おばさん, 東京世話焼きおばさん, etc.

これはNP2部分がモノ化しているため、適格性が上がったと考える。例えば「甲子園名物おじさん」では、<甲子園+名物おじさん>となっており、<名物おじさん>は、名物の一種と見なされている感がある。人というより、モノ化している。そのため(31)に近くなり、適格になると考えられる。

3つめは[役割属性]で、属性成員(NP1)が役割を表す。句表現では「の」表現で見られるが、of 表現や属格表現にはない。まず日本語の複合名詞であるが、(36)に示すように不適格になる。首都東京のように一見して適格に見える例もあるが、首都と東京の間でポーズが置かれており、アクセントパターンから考えて複合名詞ではない。同様に(37)の例もまた単なる同格表現であって、複合名詞ではない。

(36) *課長佐藤(cf. 課長の佐藤), *班長田中(cf. 班長の田中), *社長加藤(cf. 社長の加藤), etc.

(37) manager Suzuki, President Fujimori, Chairman Arafat, etc.

しかしながら英語の場合は、役割属性として(38)のような例がある((19)を採録)。よって英語の複合名詞は用法が限られているが、適格な例があるとみなす。

(38) Uncle Tom, Auntie Mame, Brother Taro, Sister Anne, etc.

４つめの[数量名詞]は、成員(NP1)に、ラベル(NP2)の数量を表す数量詞がくる。基本これは句表現の用法になる。というのも通例数量詞は一時的な属性であるため、カテゴリーとして成立しないからである。しかしそれらの数がカテゴリー性を強くもつとき、複合名詞が可能となる。(39) に日本語、(40)に英語の例をあげるが、生産性は高い。

(39) 三戒壇、三新法、三角、三食、三脚、三家、四天王、四椀、四宝、七観音、七草、etc.

(40) three-decker, three fingers, three-letter, foureyes, fourstar, four figures, etc.

4.2.3 タイプB3：<所属カテゴリー>

タイプB3では、NP1に、NP2のサブカテゴリーがくる。これは日英で異なる。日本語では(41)のようにもっぱら句で表現する。複合名詞では(42a)のように基本不適格であるが、(42b)のような例も若干ある。句で表現するような棲み分けがあると考えられる。樅木は<ぶなのき>と読み方に「の」が含まれることからも(42b)が例外的ということが分かる。

(41) チューリップの花, バラの花, スミレの花, 松の木, 銀杏の木, etc. (三宅 2011：82)

(42) a. *バラ花, *スミレ花, *松木, *銀杏木, etc.　　b. 桜花, 菊花, 杏花, 藤花, 樅木, etc.

一方英語の場合、複合名詞に適格な例がある((43))。句表現では、(44)に示すように属格表現では認められないし、of 表現であっても容認性は低い。そのため日本語とは反対に、複合名詞でもっぱら表現するように、英語では棲み分けがなされている。

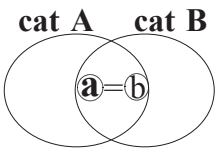
(43) alleyway, banana tree, banana fruit, cherry flower, cherry tree, cherry pit, etc.

(44) a. *rose's trees, *rose's flower, etc.　　b. ?flowers of roses, ?trees of roses, etc.

5. 複数カテゴリー推移(Plural Category Shift)

(45)に示すように、複数カテゴリー推移では、基本２つのカテゴリーでcat A側からcat B側に焦点推移する。cat A側にNP1(ラベルまたは成員)、cat B側にNP2(ラベル)がある。２つのカテゴリーには、同一化される成員があり、そのことで２カテゴリーに関連性が生まれている。

(45)



複数カテゴリーでは、緒方(2014)にならい、成員に変項(x)があるかないかで分ける。変項(x)はどちらのカテゴリーに現れるか決まっていないが、基本、成員が変項になる。変項(x)があればタイプC、なければタイプDとなる。さらに成員の種類により細分される。タイプCでは、個体成員であればタイプC1、属性成員であればタイプC2と呼ぶ。タイプDも同様に、個体成員の場合タイプD1、属性成員の場合タイプD2となる。

5.1 タイプC：変項を含む<複合カテゴリー推移>

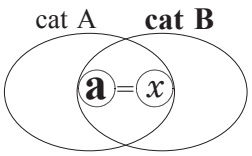
複合カテゴリー推移で変項(x)を含むものが、タイプCになる。このタイプは、句表現・複合名詞あわせて、日英で傾向が似ている。句表現の方が生産性は高いが、複合語でも一部制限がか

かるものの、適格な例はいくつもある。

5.1.1 タイプC1：<非飽和名詞>, <関係概念>, <飽和名詞の関係概念>, <数量・性質>, <行為名詞の項>

個体成員が同一化されるタイプC1は、(46)に示すように、cat B に変項(x)がある。このときNP1はcat Aの成員aであり、NP2はcat Bのラベルになる。NP2が持つ変項(x)の値が、cat Aの成員 a によって同定される。

(46)



緒方(2014)にならい、5つの用法がある。1つめは[非飽和名詞]で、NP2に非飽和名詞がくる。非飽和名詞の変項(x)は、成員aによって飽和される。句表現および複合名詞のどちらにも、日英ともに適格な表現がある。しかし複合名詞の場合、カテゴリー性が弱いものは、不適格となる。日本語で言えば(47)は適格で、(48)は不適格の例となる。(48)では他と区別される存在となるべくカテゴリー性がなく、不適格となる。

(47) ショパン・コンクール優勝者, 大学創立者, 生成文法理論研究者, 自由民主党執行部, etc.

(48) *洋子相手, *芝居主役, *ハムレット主役, *太郎上司, *本作者(cf. 本の作者), etc.

英語の場合も同様で、(49)にあるように通例適格だが、カテゴリー性が弱いものは不適格になる。

(49) Microsoft Founder, book author, competition winner, *Tom boss(cf. Tom's boss), etc.

2つめは[関係概念]で、NP1を基準として、関係概念がNP2にくる。句表現と同様に、複合名詞においても適格な例が見られるが、句表現に比べ生産性は落ちる。日本語の場合、(50)のように、一時的複合名詞も含めて生産性は高い。関係概念を加えたものが、カテゴリーと見なされやすいことが分かる。

(50) 国外、岩下、戸前、窓前、雲上、クリスマス翌日、終戦前日、大気圏外、etc.

一方英語の複合名詞の場合、(51)のようにあるにはあるが、生産性は日本語に比べてかなり低い。英語の場合、関係概念を加えたものが、カテゴリーと見なされにくく、一時的な関係と捉えられがちであることが分かる。日英で同じ用法でも、カテゴリー性に違いがある。

(51) mountaintop, sea-bottom, stage left, stage right, etc.

3つめは[飽和名詞の関係概念]で、元々は変項を持たない飽和名詞NP2が、一時的に関係概念となり、変項(x)を持つものになる。関係概念が一時的ゆえに、多様な解釈を許す。しかしながら句表現で適格であっても、(52)(53)のように複合名詞では不適格となる。理由は簡単で、カテゴリーをなしていないからである。こうした一時的な関係は、恒久性がなく、いわばその場限りでカテゴリーをなさない。そのためカテゴリー性を強く要求する複合名詞とは、相性が悪く、不適格になると考えられる。

(52) *父本(cf. 父の本), *3階居酒屋(cf. 3階の居酒屋), *東京芸人(cf. 東京の芸人), etc.

(53) *Bob book(cf. Bob's book), *third-floor lobby, *Osaka women, etc.

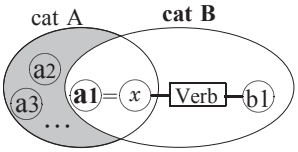
４つめは[数量・性質]で、NP2に、NP1の数量・性質等を表す語が現れる。句表現と同様に、複合語でも適格である。しかし英語の複合語では分離型になっており、構成している語同士の結びつきはやや弱い。複合語としては句寄りの表現と言える。

(54) 土地面積、空間体積、商品個数、製品種類、売上平均、運動能力、etc.

(55) vehicle weight, antenna length, floor area, nuclear volume, etc.

５つめは[行為名詞の項]で、NP1が、NP2(行為名詞)の項になっている(内項または外項)。構造としては(56)になる。動詞の項が変項(x)になっている。日本語の場合、句表現のみならず複合名詞においても生産的である((57))。しかし英語の場合、属格表現または of 表現が自然であって、(58)のように複合名詞の例もあるにはあるが、分離型であるし、適否の判断が分かれる例になる。英語の複合名詞では、日本語より強いカテゴリー性がこの用法で求められると考える。

(56)



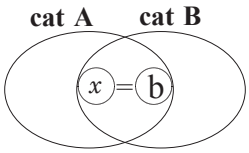
(57) 物理学研究、助手採用、被害者救助、事件調査、予算削減、ポート紛失、etc.

(58) city destruction, prisoner release, budget reduction, etc.

５.１.２ タイプC2：<属性特定>, <否定的呼びかけ>, <属性の比喩>

タイプC2は属性成員の同一化で、(59)に示すようにcat Aに変項(x)がある。cat AのラベルがNP1、cat BのラベルがNP2になる。cat Aのラベルからcat Bのラベルへと焦点推移する。タイプC2には、３用法ある。

(59)



１つは[属性特定]で、単純に、NP1の属性(x)が、NP2の属性の一つと一致する。属格表現を除けば、句表現・複合名詞ともに、適格な例がある。ただし日本語の複合名詞では、料理名などの場合には問題ないが、それ以外の場合、一時的な造語の感がでる。例えば(60)の「カーブすっぽ抜け」は雑誌等で見いだすことができるが、それを支える文脈が必要に思える。つまりカテゴリー性がやや弱い。一方英語の複合名詞では、(61)のように句表現より自然な表現であり、容認性が高い。そのため英語の場合、この用法に関しては、句表現と複合名詞で棲み分けがあると考える。

(60) カーブすっぽぬけ, フォーク落ちそこない, 牛肉アスパラガス巻き, すっぽんわさびあへ

(61) hamachi sashimi, vinegar marinade, fish cake, brandy sour, etc.

２つめの[否定的呼びかけ]は、(62)のように否定的内容を直接訴えるものになる。これは日本語の「の」表現にのみ見られる用法で、英語の句表現及び日英の複合名詞にはない(複合名詞の例は(63)(64))。これはカテゴリー性がないからと考えられる。語順を換えた「ばかねえちゃん」「嘘つき太郎」は適格であるが、これらは[属性特定]であって、この用法にはならない。

(62) a. おねえちゃんのバカ, b. 太郎の嘘つき　(寺村 1991：249)

(63) *おねえちゃんバカ、*太郎嘘つき、etc.　　(64) *mom fool, *Bob liar, etc.

３つめは[属性の比喩]で、比喩表現の一種になる。NP1の属性が何か(x)といえば、NP2の属性と同一と述べる。これは(65)に示すように of 表現に見られる用法である。この用法は、他の句表現および複合名詞では、すべて不適格になる(複合名詞の例は(66)(67))。これはNP1が、NP2に対して際立ちが弱く、複合名詞としてカテゴリー性を持ちえないからと考えられる。そのため語順を換えた angel girl, bear malice などの例は適格となるが、これらは[属性特性]の用法である。

(65) a bear of a man, an angel of a girl, a slip of a girl/lad, a beast/bull of a man

(66) *男けだもの、*少女天使, etc.　　(67) *girlangel, *manbull, *manbear

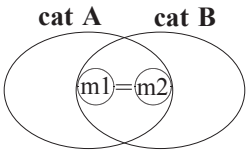
5.2 タイプD：変項を含まない <複合カテゴリー推移>

タイプDは変項を含まず、単にNP1がNP2を叙述する。個体成員の場合タイプD1、属性成員の場合タイプD2に細分される。タイプDは[属性一致]を除いて、日英のふるまいが、句表現と複合名詞において異なる。

5.2.1 タイプD1：<二重所属>

タイプD1では、個体成員が同一化される(68)の構造を持つ。cat Aとcat Bの両方に所属する成員があり、cat Aのラベル(NP1)からcat Bのラベル(NP2)に焦点推移する。これを[二重所属]と呼ぶ。この用法は日英ではっきりと異なる。(69)(70)のように日本語では、「の」表現及び複合名詞で用いられる。

(68)



(69) a. コレラ患者の大学生, b. ピアニストの政治家（西山 2003: 19）

(70) 学生社長、学者政治家、女芸人、タレント弁護士、など

一方英語では、複合名詞のみで用いられる((71)(72))。英語の複合名詞はcopulative compoundと呼ばれるものでかなり生産的である。英語では棲み分けがあるのに対し、日本語にはない。

(71) bartender-psychologist, scholar-priest, washer-dryer, etc.（Olsen 2001）

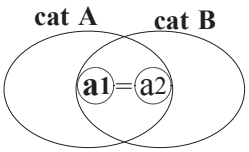
(72) a. *the college student of a cholera patient, *the politician of a pianist, etc.

b. *the cholera patient's college student, *the pianist's politician, etc.

5.2.2 タイプD2：<属性一致>, <程度一致>

タイプD2では、属性成員が同一化され、(73)のような構造を持つ。cat Aのラベルまたは成員がNP1となり、cat BのラベルがNP2となる。cat A側(ラベルか成員)からcat Bのラベルへと焦点推移する。これには２つの用法がある。１つは[属性一致]で、２つのカテゴリーで属性が一致する。属格表現を除き、句表現・複合名詞において日英ともに適格な例が存在する。しかしながらカテゴリー性を強く要求されるため、カテゴリーとして確立していなけれ

(73)



ばならず、一時的な表現は複合語にならない。生産的ではあるが、制限が強いと言える。複合名詞の例を日本語は(74)、英語は(75)に示す。

(74) 平和国家、大盛り牛丼、紅顔、赤服、革手袋、政治心理学、etc.

(75) peace agreement, black amber, leather bag, welfare psychology, etc.

２つめは[程度一致]で、程度の属性が成員間で一致する。日本語では句表現も複合名詞も適格な例がある。むろん一時的な主観による程度表現では、カテゴリー性が弱く、複合名詞にはなれないが、誰が見てもという一般性があれば適格となる((76))。一方英語の場合、of 表現のみが適格で、複合名詞は不適格になる。英語では表現に棲み分けがなされている。

(76) 感動作品、異例人事、驚異テクニック、本物技術、etc.

(77) *wonder performance, *wonderment place, *contentment world, etc.

6．まとめ

本稿では複合名詞の生成プロセスを考えるとともに、意味の分類を行った。複合名詞は、命名プロセスにより生成され、比喩プロセスに従う。この点は of 表現、属格表現、「の」表現と共有する。そして句表現と複合名詞を比較する形で意味の分類を行った。むろん適否には違いがある。棲み分けによって適否が決まる場合もあれば、命名ゆえにカテゴリー性の違いによって適否が決まる場合もあった。また日本語と英語では、カテゴリー性そのもののとらえ方に違いがあることを示唆した。本稿で述べた命名プロセスが複合動詞、複合形容詞、複合副詞にも適用できるかどうかの検証は別稿に譲ることとしたい。

注

*1 雑誌・書籍の中には、carengineとソリッド型も散見される。ただcar engineは分離型ではあるが、他と区別されるカテゴリーになっているので、ここでは複合語と見なしていく。

*2 固有名詞で、１つだけ存在する場合であっても、属性成員の集合体になっている。そのため他と区別されるカテゴリーとみなす。これらは個体カテゴリーと呼び、通常のカテゴリーと区別する。

*3 緒方（2013b, 2014）では、[地名属性]のNP2は人に限定していたが、人と物に対象を広げる。これにともない、of 表現と属格表現も再検討する。of 表現はNP2に人がくると不適格であるが、物がくると適格になる。一方属格表現の場合、人が来ても、物が来ても不適格となる。

(i) a souvenir of Salt Lake City　(ii) *New York's souvenir

参考文献

Adams, V. 1973. *An Introduction to Modern English Word-Formation*, Longman.

姫野昌子. 1999.『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

石井正彦. 2007.『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房.

Johnston, M., & Busa, F. 1996. "Qualia structure and the compositional interpretation of compounds," In *Proceedings of the ACL SIGLEX workshop on breadth and depth of semantic lexicons*. pp. 77-88.

影山太郎. 1993.『文法と語形成』ひつじ書房.

Lees, R. B. 1966. *The grammar of English nominalizations*. The Hague: Mouton.

Levi, J. N. 1978. *The syntax and semantics of complex nominals*. New York: Academic Press.

三宅知宏. 2011.「「主要部」の概念と"XのY"型名詞句」『日本語研究のインターフェイス』, pp. 79-87. くろしお出版.

緒方隆文. 2012.「固有名詞のカテゴリー要件」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第23号, pp. 103-117.

緒方隆文. 2013a.「ニックネームと語形成：カテゴリー分析による命名プロセス」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第８号, pp. 27-39.

緒方隆文. 2013b.「「NP1のNP2」のカテゴリー分析」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第24号, pp. 137-151.

緒方隆文. 2014.「A's BとB of Aのカテゴリー分析」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第９号, pp. 43-55.

奥津敬一郎. 1975.「複合名詞の生成文法」『国語学』第101集, pp. 19-33.

Olsen, S. 2001. "Coordination in Syntax and Morphology: the case of copultive compounds", In Geart van der Meer & Alice ter Meulen(eds.), *Making Sense: from Lexeme to Discourse*. Groningen: Center for language and cognition. pp. 87-101.

Selkirk, E. O. 1982. *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.

安井稔, 秋山怜, 中村捷. 1976.『形容詞. 現代の英文法』研究社.

山根一文. 2005.「英語複合語再考：名詞複合語を中心として」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第37号, pp. 53-58.

由本陽子. 2005.『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房.

（おがた　たかふみ：英語学科　教授）